文京区立森鷗外記念館
コレクション企画

鷗外への賀状

およそ百年前の明治39年・午（うま）の年、森鷗外は日露戦争の戦場から帰還します。明治から大正へ――、急速な近代化にゆれる時代の中で、鷗外は多くの作品を執筆しますが、その理想には常に国家と個人、軍医と作家というふたつの側面がありました。

本展では文京区立森鷗外記念館収蔵のコレクションの中から、当時の文人の手によるものや、平成26年の干支である午年にちなんだものなど、さまざまな〈鷗外への賀状〉を紹介します。

新春の風物詩である年賀状（賀状）が一般的にやり取りされるようになったのは、郵便制度が整いはじめた明治12年頃からと言われています。

当館には、明治25年に森鷗外と弟篤次郎（とくじろう）に届いた、落合直文（なおぶみ）（歌人）の賀状をはじめ、鷗外への賀状が80葉あまり収蔵されています。差出人は、軍人や学者のみならず小説家や詩人、歌人、俳人、画家など多岐にわたり、鷗外の生涯を通じた多彩な活躍がうかがえます。

明治39年1月12日、戦場より観潮楼に戻った鷗外を待っていたのは、小山内薫（おさないかおる）（劇作家）[1]そして平野萬里（ばんり）（歌人）[3]の賀状でした。翌13日、薫の妹八千代（やちよ）（小説家）[オモテ]は、鷗外に再会した喜びのこもった賀状を送っています。

徳富蘇峰（評論家）[2]、齋藤茂吉（歌人）[4]や城ケ島から投函された北原白秋（歌人）の賀状[5]、宮仕えの身を憂う漢詩を添えた横川唐陽（とうよう）（軍医・漢詩人）の賀状[6]など、その表情、内容はさまざまです。使われている言葉だけでなく、紙質、活字、落款などのデザインにも工夫が凝らされ、差出人各々の個性が表れています。また、当時の世相や社会的状況も色濃く反映されていて、歴史資料としても興味深いものです。

新しい年の初めに届いた小さなはがきを通して、公人、そして作家として常に時代の中心に身を置いた鷗外と文人たちとの交流をご覧下さい。

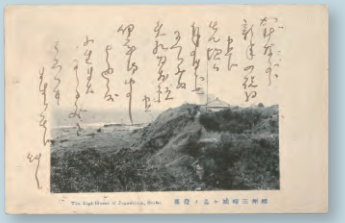
佐佐木信綱の賀状。鷗外は日露戦争の戦場へ信綱に贈られた万葉集を携えていった。

1

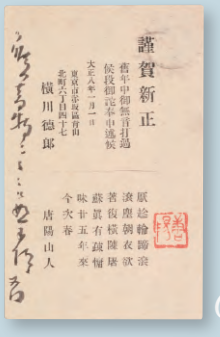
2

3

4



5



6

関連講演会

「鷗外宛年賀状」を読む

山崎一穎［森鷗外記念会会長、跡見学園理事長］

日時｜12月7日［土］午後2時―4時

文京区立森鷗外記念館2階講座室／無料／定員50名（事前申込制）

［申し込み方法］

往復はがき｜往信に「12月7日講演会」・氏名（ふりがな）・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、森鷗外記念館の左記宛先までご応募ください。

◎文京区立森鷗外記念館「展示関連講演会」受付係 宛

Eメール｜件名に「12月7日講演会」、本文に氏名（ふりがな）・住所・電話番号・Eメールを明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp宛てにご応募ください。

11月25日［月］必着　＊申し込みは、1通につき1名様（お一人様1通まで）、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。ご不明な点等ございましたら、文京区立森鷗外記念館にお問い合わせください。

［ギャラリートーク］

展示室2にて当館学芸員が展示解説を行います。

平成25年12月11日、25日、平成26年1月8日、22日［いずれも水曜日］各回午後2時から（30分程度）／申し込み不要（展示観覧券が必要です）。

中央郵便局のある風景（明治末）。［国立国会図書館蔵］≫

会期｜平成25年11月29日［金］―平成26年1月26日［日］

開館時間｜午前10時―午後6時（最終入館午後5時半）

休館日｜12月24日［火］、12月29日［日］から1月3日［金］

観覧料｜一般300円（20名以上の団体は240円）

＊中学生以下無料／障がい者手帳）提示の方と同伴者1名まで無料

［交通案内］＊一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。

電車

○東京メトロ千代田線「千駄木」駅1番出口徒歩5分

○東京メトロ南北線「本駒込」駅1番出口徒歩10分

○都営三田線「白山」駅A3番出口徒歩15分

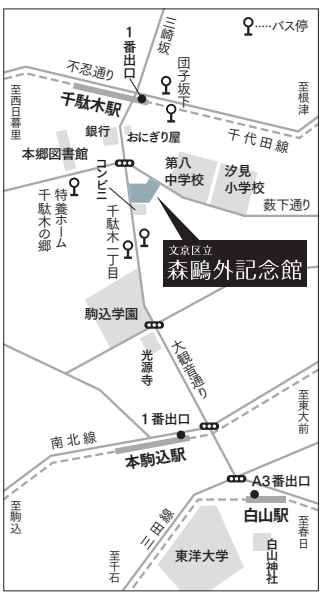
バス

○都営バス草63番系統「千駄木一丁目」下車徒歩1分

○都営バス上58番系統「団子坂下」下車徒歩5分

○Bーぐる千駄木・駒込ルート

「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車徒歩5分



文京区立森鷗外記念館　http://moriogai-kinenkan.jp
〒113-0022 東京都文京区千駄木1―23―4　電話｜03-3824-5511